

絵本を題材とした活動が絵本への関心や知識に与える影響 ：保育者養成校におけるICT導入の試み

村上 太郎^{*1}・奥村 優子^{*2}・服部 正嗣^{*2}・藤田 早苗^{*2}・小林 哲生^{*2}

^{*1}九州女子大学人間科学部人間発達学科人間発達学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}NTTコミュニケーション科学基礎研究所 京都府相楽郡精華町光台2-4 (〒619-0237)

(2019年5月28日受付、2019年5月28日受理)

要 旨

本研究は、絵本をテーマとした授業活動を行うにあたり、絵本検索システム「ぴたりえ」(以下、ぴたりえ)を設置する、という学科内の取り組みを通して学生の絵本に関する知識が増加するのかどうかを検討することを目的とした。保育者・教育者養成課程に在籍する大学1年生85名を対象に、絵本を題材とした活動を3ヶ月行い、活動期間の事前/事後で絵本への興味や関心、絵本の知識などに関するアンケートを実施した。その結果、絵本を選ぶ際に、対象年齢や発達段階に意識が向くようになるという傾向がうかがえたこと、絵本や作者についての知識量が事後において増えたことが示された。その一方でぴたりえを使用しなかった人数が多く、ICT活用への課題が浮かび上がってきた。

キーワード：絵本、ぴたりえ、絵本知識測定リスト

1 問題と目的

近年、大学、特に保育者養成校の授業においては、将来保育者となる学生の質向上に向けた様々なカリキュラム構築の取り組みがなされている。秋政・中山・伊藤(2009)は、対象となる児童や子どもの心情にむけて「共感しようとする意欲」すなわち「共感意欲」の向上をねらいとして絵本を教材としたカリキュラムの検討を行っている。また、学生が読み聞かせをする教材を作成し実際に子どもたちの前で実践するという授業展開については、パネルシアター(溝口, 2012)、紙芝居(三上, 2014)といった教材例の報告がある。教材の制作・読み聞かせの実践という内容の他にも、ビブリオバトル形式で絵本を紹介し、子どもたちに読ませたい絵本を選択するといった実践の報告もみうけられる(鈴木, 2016)。また、学生各人が「絵本ノート」を作成し、100冊読むという目標を立て、実質1年3ヶ月の期間で多くの絵本に触れていくという取り組みの報告もみうけられる(皆川, 2017)。

本専攻では、1年次に開講されるスキルアップ講座J(保育教育実践演習)という科目名の下、集中講義形式でグループワークを中心とした問題解決型学習を設定し、学園祭期間中に行われる学科企画「子どもまつり」を学修の成果発表の場として位置づけたカリキュラムを実施している。これまでは子どもが遊ぶ場を企画・構成・実践することを主な内容としていた。この授業のカリキュラム構築に向けて谷口・中村・村上(2018)は、山口とも氏によるガラクタ楽器の演奏とパフォーマンス、そしてワークショップを通じて、芸術表現の体験による学生の学びの質変容について示唆的な提言を行っている。重要な点は、芸術表現などとの出会いは「まなびほぐし」を誘発し、これまでの学生の経験を捉えなおす機会が「主体的・対話的で深い学び」に繋がっていくという点である。谷口ら(2018)は音による表現活動に着目していたが、学生の学びに関する様々なテーマを取り上げてより効果的な授業内容を検討することは重要であろう。上述のように、保育の質向上に向けたカリキュラム構築に向けて、絵本を題材とすることは実践的に重要な意味を持つ。当然のことながら、大竹ら(2019)が指摘しているように、保育や幼児教育の現場で必要とされる絵本についての知識と、日常的に家庭で読み聞かせる場合に必要とされる絵本についての知識は異なっている可能性も考えられるものの、多くの絵本を知っているということは、読み聞かせ活動の入り口となる絵本探しが容易になるということにもつながるはずである。保育者養成課程において絵本に関する知識をできる限り有しておくことは、保育士や幼稚園教諭といった専門職に就く際に間違いなく役に立つであろう。このような観点から、絵本をテーマにした活動の企画・構成(グループワーク)や実践(表現活動)を行うことで、実際

に学生にとって絵本への興味や知識量などが増すのかどうかを検証することを本研究の第一の目的とする。

また、近年メディアのデジタル化が進み、統計的な分析技術や人工知能の発展とともにICT (Information and Communication Technology; 情報通信技術) を用いた授業開発も盛んになってきている。そこで本研究では、絵本検索システムびたりえを用い、学生にとっていつでも使用可能な場所に設置することによる教育効果を検討することとした。びたりえとはNTTコミュニケーション科学基礎研究所が開発しており(藤田ら, 2017)、1)「子どもの興味や月齢にあった」絵本を推薦すること、2)「効率よく精確に」絵本を推薦できること、3)「手軽に」使えること、といった点を備えている(大竹ら, 2017)。びたりえの特色は、絵本に関する複数の特徴量(単語頻度情報、書誌情報、画像特徴量など)を用いて情報工学の最新技術と発達心理学の知見を組み合わせている点である(服部ら, 2016)。具体的には、子どもの年齢と興味に合わせた絵本を、タイトルのみからではなく、絵本の単語頻度情報に基づいて探索することに加えて、気に入った絵本があればそこからさらに内容や絵が類似した絵本を探索することができる(大竹ら, 2017)、という点で絵本選択における便利なICTツールであると言える。このICTツールを設置し、学生がびたりえに自由に触れられる環境を設定することにより、結果として絵本に関する知識量の増加がみられるかどうかを調査することを本研究の第二の目的とする。

本研究では、絵本に対する知識量を測定する際に、大竹ら(2019)が開発した絵本知識測定リストを指標として用いることとする。このリストは、日本における養育者の絵本に対する知識を測定することを目的として作成された。この指標に関しては、得点の高さが家庭における読み聞かせ環境の豊かさを示す指標として有効であること、また養育経験の個人差を反映していることという結果などを基に、リストの妥当性が確認されている。また、保育士養成課程に通う大学生は、養成課程に在籍していない大学生よりリスト得点は高いものの、養育者と比べるとリスト得点が低いということが示されている(大竹ら, 2019)。つまり、このリスト得点は、絵本や絵本に関する情報に触れる経験量を反映している可能性が高く、学修期間中のグループワークや実践だけでなく、びたりえを積極的に使用した学生のリスト得点は、びたりえを使用していない学生より高くなることが考えられる。

そのような観点から、絵本をテーマとした活動を行うことに合わせて絵本検索システムびたりえを設置し、学生に自由に触れてもらうという学科内の取り組みを通して、学生の絵本に関する知識が増加するののかどうかを検討する。

II 方法

調査対象者

女子大学の保育者・教員養成課程に在籍する同一専攻の1年生101名。「スキルアップ講座J(保育教育実践演習)」という集中講義形式(開講時期:7月~1月)の科目の中で、学園祭期間中に「子どもまつり」という催しを企画・実施した。この催しは、学生が主体となって子ども向けの遊びやゲーム、環境構成を企画・準備・提供する学科独自の取り組みである。本調査を行った年度の子どもまつりのテーマは「絵本」であることを担当教員が説明し、絵本に関連する取り組みを行った。

また、びたりえを、学生が空き時間などに過ごすフリースペースに3ヶ月設置し、学生の好きな時間に使用してよいことを伝えた。

質問項目

絵本アンケート:絵本への興味や関心を尋ねる項目(例「あなたは、絵本をどの程度好きですか?」など)、絵本の探し方に関する項目(例「あなたは、絵本は普段どのように探しますか?」)、絵本に関する知識の必要性に関する項目(例「保育者として、絵本の知識はどの程度必要だと思いますか?」)などの10項目から構成される質問紙を作成した。

絵本知識測定リスト:絵本に対する知識の量を測定する指標として、大竹ら(2019)が開発した絵本知識測定リストを使用した。リストには絵本のタイトルまたは絵本作者の名前が40挙げられており、リストに挙げられている項目それぞれについて知っているものについて○をつけて回答してもらう、というものであ

った。

調査手続き

前述した絵本アンケートと絵本知識測定リストを事前・事後の2時期に実施した。

事前調査(201X年9月):授業の中で、絵本アンケートと絵本知識測定リストへの回答を求めた。なお、2時点での縦断的な変化について検討するため、質問紙は記名式としたが、回答内容が成績や個人の学生生活に影響を及ぼすことは無い旨を説明した。

事後調査(201X+1年1月):授業の中で、事前調査とほぼ同じ内容のアンケートを実施した。事後調査においては、ぴたりえの使用の有無について、ぴたりえを使ってみた感想、(使用しなかった場合)なぜ使用しなかったか、といった質問項目を追加した。事前調査同様、質問紙は記名式とし、回答内容が成績や個人の学生生活に影響を及ぼすことは無い旨を説明した。

なお、受講者101名のうち、事前調査では87名、事後調査では97名の回答が得られ、両調査で回答が得られた学生は85名であった。本研究では2時点での比較を試みるため、両調査で回答が得られた85名を分析の対象とする。なお質問紙の集計に際し、欠損値は最頻値を代入することでデータの補正を行った。

III 結果

1. 絵本アンケートの事前/事後の比較

絵本への関心や絵本選びに関する質問Q 1～Q10について、各項目の単純集計(表1)を基に比較を行う。

1) 絵本への関心について

Q 1「あなたは、絵本をどの程度好きですか?」では、事前では全員が「非常に好き・まあまあ好き」と回答していたが、事後では「非常に好き」「あまり好きでない」の回答が若干増えていた。事前では漠然とした絵本への好意的なイメージが、絵本について考える作業を通して、改めて好きかそうでないかの判断に分かれたものと考えられる。Q 2「あなたは絵本にどの程度興味がありますか?」では、Q 1と同様の傾向がみられた。具体的には、事後において「非常に興味がある」「あまり興味がない」という回答の若干の増加がみられた。

Q 3「あなたは、現在、絵本をどのくらい読んでいますか?」では、「あまり読まない」と回答した人数が事後では若干減り、「ときどき読む」と回答した人数が若干増加した。「まったく読まない」と回答した人数にほとんど変化はないと考えられる。

2) 絵本探しについて

Q 4「あなたは、絵本は普段どのように探しますか?」(複数回答可)においては、「インターネット」「書店・図書館」「口コミ」において若干回答者の増加がみられた。しかし、Q5「あなたは、絵本を探す作業は楽しいですか?」においては事前と事後で人数分布にほとんど変化は見られなかった。

Q 6「あなたは、子どもに絵本を選ぶ作業を難しいと思いますか?」では、「非常に難しい」「まあまあ難しい」と回答した学生が大半を占めており、絵本選びの作業は変わらず難しいと感じられていることがうかがえる。続いてQ 7「(Q 6で「非常に難しい」「まあまあ難しい」を選んだ人) どういった点が難しいと思いますか?」(複数回答可)では、事後において「発達段階に合わせた」本選びが難しいという回答が増加していることがうかがえる。併せてQ 8「保育者の立場として、絵本選びのポイントは何だと思いますか?」(複数回答可)においても、事後において「対象年齢」「発達段階にあったもの」の項目にチェックを入れる回答者が多くなっていることから、読む相手(子ども)の年齢や発達段階を意識した絵本選びの重要性が認識されるようになっていくことがうかがえる。一方で「擬音語・擬態語の多いもの」の項目にチェックを入れた回答者が少なくなっていることは興味深い。

3) 絵本に関する知識の必要性について

Q 9「保育者として、絵本の知識はどの程度必要だと思いますか?」においては、事前・事後ともに全

での回答者が「非常に必要」「まあまあ必要」と答えており、絵本に関する知識の必要性については変化がなかった。Q10「今のあなたは、絵本に関する知識をどの程度身につけていると思いますか?」については、「まあまあある」と回答した学生が若干増えており、絵本をテーマにした活動を通して絵本に関する知識を得たという自信をもった学生の存在がうかがえる。

表1. 絵本に関するアンケートの単純集計の結果

Q1. あなたは、絵本をどの程度好きですか?

	事前	事後
非常に好き	22	29
まあまあ好き	63	51
あまり好きではない	0	5
まったく好きではない	0	0

Q3. あなたは、現在、絵本をどのくらい読んでいますか?

	事前	事後
しょっちゅう読む	1	0
ときどき読む	19	26
あまり読まない	40	32
まったく読まない	25	27

Q5. あなたは、絵本を探す作業は楽しいですか?

	事前	事後
非常に楽しい	24	25
まあまあ楽しい	55	53
あまり楽しくない	5	6
まったく楽しくない	0	1

Q7. (Q6.で①②を選んだ人) どのような点が難しいと思いますか?

	事前	事後
興味を引く内容	41	44
発達段階にあわせた	35	47
そもそも分からない	5	4
自分では選びきれない	25	24
よしあしの判断	4	6
保育の導入	10	11
その他	0	0

Q9. 保育者として、絵本の知識はどの程度必要だと思いますか?

	事前	事後
非常に必要	52	57
まあまあ必要	29	28
あまり必要ない	0	0
まったく必要ない	0	0

Q10. 今のあなたは、絵本に関する知識をどの程度身につけていると思いますか?

	事前	事後
非常にある	3	2
まあまあある	5	13
あまりない	62	60
まったくない	11	10

Q2. あなたは絵本にどの程度興味がありますか?

	事前	事後
非常に興味がある	16	21
まあまあ興味がある	61	54
あまり興味がない	6	10
まったく興味がない	1	0

Q4. あなたは、絵本は普段どのように探しますか?

	事前	事後
インターネット	21	26
書店・図書館	65	72
口コミ	18	24
雑誌・新聞	11	8
その他	2	2

Q6. あなたは、子どもに絵本を選ぶ作業を難しいと思いますか?

	事前	事後
非常に難しい	12	10
まあまあ難しい	45	54
あまり難しくない	27	21
まったく難しくない	1	0

Q8. 保育者の立場として、絵本選びのポイントは何だと思いますか?

	事前	事後
① ストーリー	52	52
② 色彩や絵の雰囲気	46	47
③ 対象年齢	24	43
④ 価格	1	2
⑤ 作者	2	0
⑥ 子どもの興味・関心	63	64
⑦ 行事	6	8
⑧ 自分が読みたいものかどうか	4	8
⑨ 擬音語・擬態語の多いもの	20	9
⑩ 言葉の表現の仕方	34	31
⑪ 発達段階にあったもの	44	67
⑫ 発達を見越したもの	9	14
⑬ メディアでの評判や口コミ	4	6
⑭ ベストセラーのもの	4	4
⑮ 子どもに知って欲しい内容が含まれるもの	39	48

2. ぴたりえの使用について

事後調査において、3ヶ月間設置したぴたりえの使用頻度などについて回答を求めた。単純集計を表2に示す。

Q11「ぴたりえの使用頻度」については、一番多く使用したと回答したもので「3、4回」が多く、半数以上は全く使用しなかったという回答が得られた。Q11 a)「ぴたりえを使用した印象」に関しては全ての回答が「また使いたい」「機会があれば使うかも」にチェックされていた一方で、Q11 c)「使わなかった理由」には「使う機会がなかったから」が最も多く、次いで「PC仕様だったから」という回答がみられた。これらの結果から、興味をもって使用する学生がいる一方で、ぴたりえを使用してみたいという動機づけを駆動するような働きかけや仕組みが必要であることが示唆された。

また、Q11 b)「もっとこういう機能があればいいな」に対して自由記述を求めたところ、「携帯(スマホ等)で見れる」「アプリがあるといい」「あらすじ等が読めたり、実際のページの絵を見れたりするとよい」「昔

のものも出てくるので、欲しくても出版社になかったら買えないから、買えるか買えないか知れる機能が欲しい」といった、データベースへのアクセスの利便性に言及するものや、タイトルの検索だけでなく内容（あらすじ）や絵本の中の絵を実際に見たいという要望もみうけられた。

表2. びたりえの使用に関する結果

Q11. びたりえの使用頻度

5回以上	0
3, 4回	8
1, 2回	23
0回	53

Q11. a)びたりえを使用した印象

また使いたい	11
機会があれば使うかも	20
もう使わないだろう	0
その他	0

Q11. c)使わなかった理由

① 使う機会がなかったから	39
② 面倒だったから	1
③ あまり興味が持てなかったから	1
④ 設置場所が適切でなかったから	1
⑤ PC仕様だったから（アプリだと使いたい）	9
⑥ 一台しかなく遠慮してしまったから	3
⑦ 使い方が理解できていなかったから	0
⑧ その他	2

3. 絵本知識測定リストにおける得点の変化

本研究では、絵本知識測定リストにおけるタイトルリスト40項目と絵本作者測定リストの39項目（岩井俊雄氏を除く）を分析の対象とした。岩井俊雄氏を除外した理由は、活動の期間中に本学にて講演を行ってもらっており、活動を通して学生自身が作者についての知識を得たのかどうか判断がつかなかったためである。絵本タイトル知識測定リストと絵本作者知識測定リストの事前事後の結果を表3に示す。

事前事後において知識量に変化がみられるかどうかを調べるために、対応のある t 検定を行った。その結果、絵本タイトル知識測定リストの得点においては、事前 ($M = 11.96, SD = 5.46$) より事後 ($M = 14.44, SD = 5.15$) の方が有意に高いことが示された ($t(84) = 6.12, p < .001$)。また、絵本作者知識測定リストの得点においても、事前 ($M = 2.40, SD = 2.21$) より事後 ($M = 3.67, SD = 2.44$) の方が有意に高いことが示された ($t(84) = 6.01, p < .001$)。これらの結果から、絵本をテーマにした期間中に学生は絵本や絵本作者に関する知識を多く得ていたということが示唆される。

表3. 絵本タイトル知識テストと絵本作者知識テストにおける事前事後の結果

絵本タイトル知識テスト	事前	事後	絵本作者知識テスト	事前	事後
1 もげら もげら	8	15	1 せなけいこ	14	17
2 きゅうりさんととまとさんとたまごさん	3	4	2 川田健	0	1
3 ぼくのくれよん	55	61	3 太田大八	0	0
4 じゃあじゃあびりびり	6	8	4 渡辺茂男	2	5
5 がたんごとんがたんごとん	30	37	5 佐野洋子	7	7
6 ねこねここねこ	14	18	6 あまんきみこ	26	42
7 ぐりとぐら	79	85	7 かがくいひろし	2	3
8 とべバッタ	9	10	8 谷川俊太郎	46	61
9 どろんこハリー	28	36	9 瀬川康男	1	3
10 ひとまねこぎる	6	6	10 なかがわりえこ	15	23
11 きかんしゃやえもん	6	8	11 あきやまただし	8	7
12 しっぽのはたらき	0	1	12 長新太	0	1
13 しろくまのパンツ	14	36	13 馬場のぼる	0	0
14 三びきのやぎのらがらどん	47	54	14 島田ゆか	6	8
15 ティッチ	3	5	15 なかえよしを	3	3
16 きょうはみんなでクマがりだ	2	3	16 林明子	13	12
17 三びきのこぶた	82	83	17 鈴木のりたけ	1	1
18 11びきのねこ	55	66	18 五味太郎	5	7
19 おふろでちゃぶちゃぶ	19	23	19 かんざわとしこ	0	3
20 きつねのかみさま	6	11	20 なかやみわ	10	19
21 おぼけのパーバババ	65	73	21 松谷みよ子	6	15
22 とりかえっこ	7	9	22 真珠まりこ	2	5
23 ねずみのすもう	24	31	23 木下順二	4	4
24 しましまぐるぐる	2	1	24 いわむらかずお	9	24
25 まっくらネリノ	3	3	25 さとうわきこ	4	5
26 おおきなかぶ	76	82	26 赤羽末吉	1	3
27 はらぺこあおむし	81	85	27 つちだのぶこ	5	8
28 どんどこももんちゃん	3	6	28 にしまきかやこ	2	0
29 ぶたたぬききつねねこ	24	26	29 松居直	0	1
30 てぶくろ	54	65	30 わかやまけん	6	8
31 ガラスめだまときんのつのヤギ	2	2	31 寺村輝夫	0	0
32 ねないこだれだ	42	50	32 香山美子	0	1
33 いいおかお	7	11	33 あきびんご	0	0
34 しろくまちゃんのほっとけーき	45	63	34 柴田愛子	0	0
35 くらねこかあさん	5	5	35 大川悦生	0	1
36 ピーターのくちぶえ	3	3	36 入山さとし	2	5
37 いないないなばあ	62	79	37 いまえよしとも	1	2
38 しずかなおはなし	1	2	38 瀬田貞二	2	1
39 だるまちゃんとてんぐちゃん	32	48	39 星川ひろ子	1	2
40 しょうぼうじどうしゃじぶた	7	13	40 岩井俊雄	—	—
一人当たりの平均点	11.96	14.44	一人当たりの平均点	2.40	3.67

4. ぴたりえ使用の有無と絵本タイトル知識測定リスト・絵本作者知識測定リストの得点変化との関連

それでは、ぴたりえを使用していた群と使用しなかった群とで2つのリスト得点に差はみられるのであろうか。Q11「ぴたりえの使用頻度」における回答をもとに、使用頻度が「3, 4回」と「1, 2回」を「ぴたりえ使用群 ($N = 31$)」、「0回」を「ぴたりえ不使用群 ($N = 53$)」と群分けした。なお、1名がQ11の項目に未回答であったため分析から除外した。

ぴたりえ(使用/不使用)を被験者間要因、時期(事前/事後)を被験者内要因とする2要因分散分析を行った。絵本タイトル知識測定リストに関する分析の結果、時期の主効果が有意であり、事前 ($M = 11.94$, $SD = 5.48$) より事後 ($M = 14.42$, $SD = 5.18$) の得点が有意に高いことが示された ($F(1, 82) = 33.7$, $p < .001$)。ぴたりえの主効果については不使用群 ($M = 12.43$, $SD = 4.78$) より使用群 ($M = 14.45$, $SD = 6.30$) の得点が高いことが有意な傾向として示された ($F(1, 82) = 3.28$, $p = .073$)。交互作用はみられなかった。

続いて、絵本作者知識測定リストに関する分析の結果、ぴたりえの主効果がみられ、不使用群 ($M = 2.61$, $SD = 1.94$) より使用群 ($M = 3.79$, $SD = 2.95$) の得点が有意に高いことが示された ($F(1, 82) = 6.37$, $p = .013$)。また、時期の主効果もみられ、事前 ($M = 2.40$, $SD = 2.23$) より事後 ($M = 3.69$, $SD = 2.45$) の得点が有意に高いことが示された ($F(1, 82) = 36.3$, $p < .001$)。交互作用はみられなかった。これらの結果をまとめると、事後における得点の向上がみられたこと、そしてぴたりえ使用群において絵本タイトル知識測定リスト、絵本作者知識測定リストの双方で得点が高かったということが示された。

IV 考察

本研究の目的は、絵本を題材とした活動を行うことに加えて、絵本検索システムびたりえを導入することで、保育者養成校に在籍する学生の絵本に関する知識が増えるかどうかを検討することであった。約3ヶ月の活動期間とびたりえの設置を行い、絵本への関心や態度、そしてびたりえの使用の有無と絵本や作者についての知識を、活動の事前／事後の2時点で調査した。その結果、絵本を選ぶ際に、対象年齢や発達段階に意識が向くようになるという傾向がうかがえたこと、絵本や作者について知識量が事後において増えたことが示された。また、びたりえを使用しなかった人数も多く、ICT活用への課題が浮かび上がってきた。

1. 絵本への関心・態度について

まず、絵本が好きかどうかに関する項目からは、活動を通してより好きになった学生とそうではない（あまり興味を持ってない）学生の存在が示唆された。事前と事後で大きな分布の変化はみられなかったものの、一部の学生においては当初の絵本に対する漠然とした関心が活動を通して意識化されるようになったことが考えられる。本専攻に在籍する学生は、保育士や幼稚園教諭を志望する学生と小学校教諭を志望する学生に大別される。学生の志望する進路や方向性に対して絵本という題材が提示された時、保育士や幼稚園教諭を志望する学生にはより好意的に捉える一方で、小学校教諭を志望する学生には積極的な取り組みがみられない場合もあったかもしれない。将来希望する職種が混在しているという専攻の特徴も考慮しながらカリキュラムを検討していくことは重要であると考えられる。

そのような中でも、絵本を選ぶ際に気をつけるポイントとして、対象となる子どもの年齢や発達段階を挙げる学生が多くなったことは興味深い。確かに、絵本読みにおいては、誰に・どのような状況（ねらい）で読むのかによって選ぶ絵本が変わってくる。この視点の重要性を認識するようになったということは、今回の取り組みがある程度機能したと言ってよいであろう。その一方で、年齢や発達段階に応じた絵本選びの重要性を認識できるようになったからといって、スムーズな絵本選びが可能になるわけではない。子どもの年齢や発達段階に応じた絵本とはどのようなものか、どのような絵本を選べばよいのか、といった難しさを改めて感じるようになった学生も少なからずいたことだろう。絵本に関する情報や知識だけでなく、子どもの言語能力や認知機能などの発達に関する知識や理解も加味しながら活動を行っていくことの重要性が示唆されたと考えられる。

また、絵本タイトル知識測定リストおよび絵本作者知識測定リストの結果においては、全体的に事後の得点が上がっていた。このことは、絵本をテーマにした活動の設定が、絵本についての知識量に影響を及ぼしうることを示唆する。実際、ビブリオバトル形式による絵本紹介（鈴木, 2016）や、「絵本ノート」の作成（皆川, 2017）といった取り組みは、絵本を読むことに直接介入するようなカリキュラムであり、これらのカリキュラムは知識量を増やすことを目的とする場合、非常に効果的なカリキュラムであると考えられる。しかしながら、本専攻ではグループワークに基づいた問題解決型学習も見据えているため、知識量の増加を主なねらいとすることが難しかった。そのような中でも事後調査におけるリスト得点が向上していたという結果は、一定の教育効果を持っていることの証左となりうる。これからも、学生の主体的な学びを引き出すようなカリキュラムの検討が必要であろう。

2. びたりえの使用について

上述のような難しさに遭遇した際、絵本の情報を比較的簡単に検索できるツールとしてびたりえは有効であり、学生の使用頻度は全体的に高くなるだろうと著者らは想定していた。しかしながら、予想に反してびたりえを使用する学生はあまり多くなかった。びたりえを使用しなかった理由として挙げられたものは、「使う機会がなかった」「PC仕様だったから」といったものであった。実際、びたりえの使用方法についての説明は講義内で行っていたものの、各自の興味や関心を引き出すところまで掘り下げた説明ができていなかった可能性も考えられる。現時点では、PCのセッティングでびたりえを作動させているが、アンケートの回答にもあったように、スマートフォンのアプリのような仕様でびたりえを使うことができるようになれば、情報へのアクセシビリティが高まることは十分考えられる。さらには、大学の図書館だけでなく、近隣、そ

して学生が住んでいる地域の図書館の蔵書とのリンクを図ることができれば、これまで以上に絵本へのアクセスが容易になることも考えられるが、このシステムの実用的な面については今後の課題と言える。

結果から、ぴたりえを使用した学生は、ぴたりえを使用していない学生より絵本タイトル知識測定リスト、絵本作者知識測定リストの双方において得点が高い傾向にあることが示された。また、ぴたりえの使用頻度と時期の交互作用はみられず、事前調査の時点においてぴたりえ使用群の方が両リストの得点が高い傾向にあったことから、ぴたりえ使用群に含まれる学生は、もともと絵本に関する興味や関心、(学習)活動に対する意欲が相対的に高い学生であったことが考えられる。今後は、ぴたりえ不使用群においても、ぴたりえを使用することでリスト得点の向上がみられるのかどうかを検討することが重要である。前述したシステムへのアクセシビリティも加味しながら検討することで、ICTを取り入れた学習プログラムの構築とその成果を測定する指標とを有機的に関連させることが可能になるのではないだろうか。

VI 参考文献

- 秋政邦江・中山芳一・伊藤智里. (2009). 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発—絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に—. 『川崎医療短期大学紀要』, 29, pp. 43-48.
- 藤田早苗・服部正嗣・小林哲生・奥村優子・青山一生. (2017). 絵本検索システム「ぴたりえ」～子どもにぴったりの絵本を見つけます～. 『自然言語処理』, 24 (1), pp. 49-73.
- 服部正嗣・小林哲生・藤田早苗・奥村優子・青山一生. (2016). ピタリエ: 興味・発達段階にピッタリの絵本を見つけます. 『NTT技術ジャーナル』, 28, pp. 54-59.
- 大竹裕香・奥村優子・郷原皓彦・中響子・米満文哉・佐々木恭志郎・渡邊直美・藤田早苗・服部正嗣・山田祐樹・小林哲生. (2017). 絵本検索システムを用いた図書館における親子の絵本読み支援の試み. 『読書科学』, 59 (3), pp. 134-148.
- 大竹裕香・奥村優子・山田祐樹・小林哲生. (2019). 日本における絵本知識測定リストの作成. 『認知科学』, 26 (2), 243-253.
- 三上廣子. (2014). 保育者養成における紙芝居製作の取り組み. 『帝京短期大学紀要』, 18, pp. 83-91.
- 皆川晶. (2017). 「絵本ノート」作成における一考察—保育科学生における絵本 100 冊読みへの挑戦, そして成果と課題—. 『近畿大学九州短期大学研究紀要』, 47, pp. 85-100.
- 溝口綾子. (2012). 保育者養成における保育教材に関する授業研究～パネルシアターの製作・実演を通して～. 『帝京短期大学紀要』, 17, pp. 55-62.
- 鈴木貴史. (2016). 保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題: 保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から. 『帝京科学大学紀要』, 12, pp. 147-153.
- 谷口幹也・中村紗和子・村上太郎. (2018). 保育者養成における芸術表現の可能性: 山口とも「ガラクタえんそう会」を手がかりに. 『九州女子大学紀要』, 55 (1), pp. 35-46.

**Survey on the influence of activities with picture books on the interest and knowledge of picture books
: An approach to introduce ICT in teacher- and nursery-training course**

Taro MURAKAMI^{*1}, Yuko OKUMURA^{*2}, Takashi HATTORI^{*2},
Sanae FUJITA^{*2}, Tessei KOBAYASHI^{*2}

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

NTT Communication Science Laboratories, NTT Corporation

2-4 Hikaridai, Seikacho, Sorakugun, Kyoto 619-0237, Japan

Abstract

The current study aimed to examine whether the student's knowledge of the picture books would increase by approaches to conduct a class themed on picture books and to set up the picture book search system, 'Pitarie.' We designed before-after survey, and 85 students answered the questionnaire on the interest in picture books, the title and author recognition tests to measure knowledge of picture books. Results showed that students tended to be focused on the age and developmental stage of children when choosing picture books. And the amount of knowledge about title and author of picture books in post-survey were significantly higher than pre-survey. On the other hand, many students did not use Pitarie, the agenda of the utilization of ICT was emerged.

Key words : picture books, Pitarie, Title and Author recognition tests